



きずな

2015年8月31日発行

共に育つ支援を目指すHFI

目次

- ・ 巻頭言 代表 福井誠 1
- ・ 東日本大震災支援感謝
- ・ ネパール震災報告 2
- ・ ビムからの報告 2
- ・ チルドレンホームから 3
- ・ スタディツアー参加者の声 4
早川信夫、五十嵐章
- ・ フィリピン活動報告(MICAH) 5
- ・ フィリピン活動報告(MHCPC) 6
- ・ 被災地支援報告(続き) 7
- ・ 事務局からの連絡 8



地域住民の主体性を支援する 参加型開発を目指して

開発を援助する側にとって、自分が提供する投資とその効果の関係は、気になるところです。そこで多くの開発援助には、援助者の予算規模、期待される目標や期間が予め盛り込まれるのが普通です。

しかしながら、外部の援助者が期待する目標に向かって、その通りに地域住民が活動を進めても、それは、参加型の開発とは言えません。そこで「目標(Purpose)」ではなく「企画(Project)」に住民を参加させるなら、参加型の開発になる、と考えられるのですが、これも実際には、企画の修正や中止の判断を地域住民ができるのでなければ、完全に参加者主体の企画であるとは言えません。

そこで最近では、「目標」でも「企画」でもなく、「過程(Process)」に参加させることが、参加型の開発と考えられています。つまり、外部の支援者は、投資の使い道について一切口をはさまず、むしろ地域住民が、自らそれを見出し、積極的に自分たちの開発を進めていくプロセスを支援するのです。

もちろん、開発を援助する側からすれば、このような関りは容易ではありません。しかし、地域住民の自主性、自決権を尊重し、持続的な開発を進めるためには、必要不可欠な要素です。

ローンを提供し、用途を特定しないグラミン銀行や、JICAがセネガルで実施した研修内容を必ずしも現地プロジェクトに採用することを要求しない、PRODEFIモデル、そして地域住民が自ら問題の所在を探り、解決策を見出すように促進するPRAの試みなどは、皆その実践例と言うべきでしょう。

現在HFIが取り組んでいる、サッレリでの開発も、地域住民に援助者側の目標を与えるのでも、企画を共有するのでもなく、時間はかかっても、地域住民の主体的な取り組みとなるように、地域住民自らが自分たちの状況の分析や判断を行い、開発を進められるような取り組みを実施して行きたいと考えております。ぜひご理解ご協力をお願いします。(代表 福井誠)

東日本大震災支援 ありがとうございます

東北被災地の高校生への奨学金給付をスタートしてから早4年が過ぎようとしています。今回で3回目の卒業生を送ることができました。今年は岩手と宮城の3校からHFIの給付型奨学金を受けた高校生の卒業予定者が合計8名おります。

その高校生たちは、私どもが、最初に被災地の高校を訪問した時には、まだ入学したばかりの1年生で、とても幼かったように感じた記憶があります。時の流れを感じつつも無事に高校生活を終えられたことを喜ばしく思います。

一人の男子生徒から県庁に就職が決まった、と報告がありました。高校生活3年間の毎回の報告書に公務員試験に向けて勉強を頑張っていると書いてあり、初志貫徹念願が叶った様子で、本当に喜ばしく思っております。

⇒< 7頁に続く>